

ナラティヴへの、メディアの作用性

－ はなたれ小僧さん」の「エビスナマス」を例に－

大谷鉄平*

(e-mail : teppeikun09@gmail.com)

<目次>

- | | |
|--------------------------------------|--|
| 1. はじめに | 2.6. 現地聞き取り調査結果の抜粋- 議論の方向性と して- |
| 2. 前提的議論 | 3. エビスナマスとエビナマス |
| 2.1. 対象ナラティヴ選択理由 | 3.1. 口頭ナラティヴにおけるエビスナマス・エビナマス |
| 2.2. ナラティヴの3つの様態を含む筆者の姿勢 | 3.2. 書字ナラティヴ・TVアニメにおけるエビスナマス・ エビナマス |
| 2.3. 先行文献こみる「はなたれ小僧さん」 | 4. 入力ナラティヴにおける「はなたれ小僧さん」 |
| 2.4. 「はなたれ小僧さん」概要 | 5. まとめ |
| 2.5. TV「まんが日本昔ばなし」における「はなたれ小 僧さん」 | |

キーワード: ナラティヴ (Narrative), 「はなたれ小僧さん」 (“HANATARE-KOZOU-SAN (=A Sniveling Boy)”), メディア (Media), マーケティング (Marketing), エビ
(ス) ナマス (“EBI(SU)-NAMASU, a dish made from raw shrimp”)

1. はじめに

本稿は、日本語の使用に対する外的要因の作用性に関わる記述的研究の一環であり、当該研究は、「ことばが用いられる媒体 (=メディア)」からの「ことばの使用」への作用性を検討することを目標とする。本稿では、大谷 (2015a) で示した現今のナラティヴ研究への提言を踏まえ、焦点を「物語談話 (=ナラティヴ (narrative) 1))」とのディスコースに定め、特に口承伝播 (「個」対

* 江陵原州大学校招聘教授、日本語学。本稿は、韓国日本文化学会第49回国際学術大会 (2015年10月24日、清州大学校) での口頭発表「「はなたれ小僧さん」とナラティヴ様態・メディアー「エビスナマス」と「エビナマス」を切り口として」を修正・加筆したものである。

1) 一般的にナラティヴの定義は「語り」や「物語」とされるが、これらは訳語に過ぎない。一方、本稿における定義は、野村 (2000) において、その属性を「任意の主体の経験的なできごとが時間軸に

「個」) からwebページでの発信(「個」対「不特定多数」)に至るまでを網羅する個別民話での「語の形式・意味や、ストーリー全体の様相、ならびに伝播」の実態に関する調査結果を示す。本稿は、個別メディアごとの「ことば」への意味づけの輪郭を描写するに留まらず、当該民話をコンテンツと置き換えることにより、メディアマーケティングの視座を包含したメディア論的観点より、ナラティブの存在意義ならびに伝播実態の記述的考察として学術的意義をなす。

2. 前提的議論

2.1. 対象ナラティブ選択理由

ナラティブとの様態をとるディスコースは日常生活の至る所に存在し、枚挙に暇がない。まずは、その中でも民話、特に「はなたれ小僧さん」を選択した理由を示すが、端的には、世代や発信メディアの変遷に伴う「ナラティブの様態(『口頭・書字・入力ナラティブ』。詳細は後述)」の多元化を網羅した俯瞰的検討が可能であること、殊に、「口頭伝承レベルでの民話伝播に関する実態調査に必須である、ネイティブへのインタビューが可能であること」が挙げられる。

「はなたれ小僧さん」のナラティブは、福岡県みやま市山川町真弓に残る民話・伝承とされ、TVメディアに取り上げられて以来、みやま市の観光スポットのひとつとして、web上より拡散し注目を浴びている。また、山川町郷土史研究会(2004)に代表されるように、方言談話による活字資料も存在する。しかしながら、筆者は、現地在住のインタビュー²⁾との直接対話の録音等の資料を通じ、ナラティブの複数の側面に関し解釈の相違点を認めた。そこで、本稿では特に、当該民話にみられる「エビスナマス」の表現・解釈に関する検討を切り口に、伝播におけるメディアの影響性に関し、提言を行うこととした。

そって表現されている(野村(2000:37))、との条件によってのみ規定できる、と指摘していることを援用し、「主体が経験した現場の、時間に沿った一回のディスコース」、とする。

- 2) インタビューは、以下の4人である(直接対話録音日:2015年1月27日。29分59秒)。インタビューA:福岡県みやま市山川町生まれ、現在、同市在住、90代、男性インタビューB:福岡県みやま市山川町生まれ、現在、同市在住、90代、女性インタビューC:福岡県みやま市山川町生まれ、現在、同県八女郡在住、60代、女性インタビューD:福岡県みやま市山川町生まれ、現在、同市在住、50代、女性。以下、各々のインタビューを「IA」「IB」「IC」「ID」と記す。

2.2. ナラティヴの3つの様態を含む筆者の姿勢

日本でのナラティヴ研究は、質的研究への傾向を有しつつも、量的研究としても、消費者が記した「口コミ」「お客様の声」に対する企業の活用を中心にビッグデータとしての利用が確認される。いずれの方法論であれ、ナラティヴは「言語活動（＝身体活動の所産）」レベルで調査・分析対象となる。

【表1】身体部位の類型に基づく言語活動の分類（大谷（2014））³⁾

| | 身体部位 | 言語範疇 | 具体的活動 |
|------|------|-------|-------------------|
| 言語活動 | 手 | 書字言語 | 文章(書く) |
| | | 身体言語 | ボディランゲージ、手話など |
| | | 入力言語※ | web上コミュニケーション(打つ) |
| | 口 | 口頭言語 | 談話(話す) |
| | | 身体言語 | 口で筆をくわえて書く行為など |
| | | | |

※「入力言語」は、本稿の便宜上、筆者が「造語」として用いる語である。
注：C言語などのプログラミング言語は除く(身体活動の範疇外)。

【表1】のうち、言語活動としての「文章」、「談話」は用語として定着しているものの、web上での言語活動にあたる用語は確立していない。ゆえに、ナラティヴが行われる言語範疇に着目し、本稿では、以下の用語を便宜的に設ける。

書字ナラティヴ：書字言語によるナラティヴ。主に文献や手記を通じたナラティヴであり、テキスト分析の主たる対象。

口頭ナラティヴ：口頭言語によるナラティヴ。民話・伝承の根源的な方法であり、「噂」「聞き伝え」が主たる対象。

入力ナラティヴ：入力言語によるナラティヴ。「即時的・広範な」発信が可能で、web上で閲覧可能なサイトの各種記事・投稿が主たる対象。

なお、以上の3様態は、上掲注のナラティヴの定義より、相互に関連する。例えば、「書字ナラティヴ→口頭ナラティヴ」の推移は、「読み聞かせ」「(TVやラジオでの)ナレーション」を代表とした行為に認められる。また、「入力ナラティヴ→口頭ナラティヴ」の推移は、ある個人Aがweb上の「口コミ」を閲覧して得た情報をもとに同僚Bに口頭で伝え、昼食の場所を提案する、などを指す。

また、一見「口頭ナラティヴ」に属すると思われがちな事象に関し、本稿では「書字ナラティヴ」に分類するものもあることも付言したい。例えばTVメディア

3) 同論では、「話し言葉」「書き言葉」「打ち言葉」の説明概念における不安定性を包括する試みとして、「身体活動の所産」レベル、「表現的特徴（＝話体・文体）」レベルとの二層性を提案した。

でのナラティブ、代表例としてドラマやアニメ、報道番組などは（アドリブを例外とし）台本や原稿が存在し、筆者はこれをもとに分類を行っている（ラジオメディアも、これに準ずる）。なお、本稿は、あくまで「ことば」のみを検討・考察対象とするため、付随する映像そのものは、ナラティブに対する臨場性や受信者主体の観念固定に奏功する「補助的効果」と捉えたい。

2.3. 先行文献にみる「はなたれ小僧さん」

冒頭に述べたように、「はなたれ小僧さん」は、福岡県みやま市（旧：山門郡）山川町真弓に残る民話とされるが、布村（1994:2-3）によると、嶺香生（＝多田隈正巳⁴⁾）（1929）に、熊本県南関町に関する記述があり、その後、「昔この里に…」と本文が始まるという。すなわち、元来は熊本県の民話であったという。同氏によると、加来（1960:45-48）での内容に関し、多田隈（1929）との差異を示したうえで、「いつ採集したかは不明ですが、多田隈さんに聞いた話ではなくて、福岡県三井郡小郡町の大仲美代子さんが、真弓村に行ってもう一度採集したということで、福岡県の民話であるとしてしまうのです。（布村（1994:3））」と言及する⁵⁾。また、柳田（1978）に対しては、「話はほとんど忠実に再話されています。（布村（1994:2））」とするものの、「肥後国の真弓の里という山奥の村に」とあるが、この「真弓の里」が熊本県ではなくて福岡県ですね。（同上）」と指摘する。このように、書字ナラティブの系譜においても、口頭ナラティブに認められるような差異化が確認される。

一方、現在では、みやま市商工観光課（2009）、「みやま市オフィシャルサイト」⁶⁾をはじめ、「はなたれ小僧さん」の民話は、山川町真弓の観光スポットとしての役割を果たしている。この契機は、冒頭のTVメディア「まんが日本昔ばな

4) 柳田（1942:55）には、「是（筆者注：はなたれ小僧さん）は熊本縣でも北の境、玉名郡の真弓という山中の小部落に、長く傳へられて居る昔話であつて、其話の中に出て来る南關の町に生れた、多田隈正巳君の報告する所であつた」とある。

5) 「はなたれ小僧さん」に関し、直接対話において、IDは「子供の頃は知らなかった」と言及している。IBもまた、「昔は（そのような話は）無かった」と述べている。このことから、少なからず1960年以前は、「福岡の民話」に比し、「熊本の民話」としての認知度が高かったのではないかと推察される。なお、吉田（1987:106）によると、加来（1960）と同年、荒木精之編『肥後の民話』（未来社）が刊行され、ここにも当該民話に関する言及があるという。これが、以下2.5の「まんが日本昔ばなし」における出典県名としての「熊本県」と通底する点は、注目に値する。

6) <http://www.city.miyama.lg.jp/info/> 検索日:2015年2月19日。

し」（1976）放映に伴う全国的伝播によるものと推察される⁷⁾が、特にweb上では、その珍奇なネーミング（はなたれ）も奏功し、石像が祀られる場所を訪れる人々が多いことが、個人ブログにおける記事の多さからも確認できる。

2.4. 「はなたれ小僧さん」概要

次に、「はなたれ小僧さん」の概要を、みやま市商工観光課（2009）より引用する。なお、ストーリーは山川町郷土史研究会（2004）と合致するが、表記は同書とは異なり、共通語となっている。

むかし、正直者だが貧しい老夫婦がいました。ある日、おじいさんが売れ残った柴を水神さまに捧げると、ひとりの女が現れ、柴の札をいい、小さな小僧さまを差し出しました。「このはなたれ小僧さまは、何でも願いごとを叶えてくださいますが、エビナマスしか召し上がりません。毎日作ってさしあげてください。」二人は小僧さまを大事に育てました。すると、二人は村一番の大金持ちになりました。そうなるじゃまなのは小僧さま。水神さまのもとに返したとたん、二人はもとの貧乏暮らしに戻りました。（みやま市商工観光課（2009:11）。傍線は筆者による）

2.5. TV「まんが日本昔ばなし」における「はなたれ小僧さん」

次に、TVメディアで放映された「はなたれ小僧さん」に関し、概略的に紹介する。番組名は「まんが日本昔ばなし」で、TBS系列で1975年から1994年まで放映されたTVアニメである。現在では、当該番組で放映された昔話に関する情報、あらすじをデータベース（「まんが日本昔ばなしデータベース」<http://nihon.syoukokuai.com/> 検索日：2015年2月18日）で閲覧することができ

7) 布村（1994:2）には、「（筆者注：「はなたれ小僧さん」を）嶺香生さんが「旅と伝説」という雑誌にはじめて発表しましたが、その当時、民話をあつめていた柳田国男さんの目にとまって、全国に広まっていくわけです。」とあるが、メディアに基づく伝播性からすると、「（認知度として）全国に広まる」というのは首肯し難い。すなわち、書籍によって全国的に出版（＝発信）されていても、「関心のある人物」しか手に取らない。一方、TVの場合、関心の有無にかかわらず、視聴していれば目に入る（＝受信する）。後述する西日本新聞の「はなたれ小僧さんの石像の除幕式」ニュース（ならびに3.2に掲げる聞き取り調査でのIDの発言）が1988年であることを踏まえても、柳田（1942）、あるいは多田隈（1929）、さらには加来（1960）などの活字資料における紹介（＝書字ナラティヴ）の影響性は、TVメディアや新聞メディアの伝播性に比し、弱いものと認めざるを得ない。

る。なお、同データベースによると、冒頭の1976年の放映に加え、1990年にリメイク版が放映されている。以下、両者に関する情報を抜粋する。

【表2】 「まんが日本昔ばなし」における「はなたれ小僧さん」

| タイトル | 放映年月日 | No. | 演出 | 文芸 | 美術 | 作画 | 県名 |
|----------|-------------|------|-------|-----|-------|------|-------|
| はなたれ小僧さま | 1976年10月30日 | 92 | 樋口雅一 | 沖島功 | 竹内靖明 | 高橋信也 | 熊本 新潟 |
| はなたれ小僧さま | 1990年10月6日 | 1215 | しもゆきこ | 沖島勲 | しもゆきこ | 大西治子 | 熊本 |

【表2】より、タイトルはいずれも「はなたれ小僧さま」との共通語表記であり、視聴の結果、アニメ内のナレーションも、両者とも共通語であった。一方、スタッフは原版・リメイク版で異なり、画はもとより、ストーリー、表現が大いに異なる。加えて、(民話)出典県名は、布村(1994)が指摘しているように、「熊本県」とあり、「福岡県の民話」としていない点特徴的である。

2.6. 現地聞き取り調査結果の抜粋-議論の方向性として-

最後に、現地聞き取り調査の結果得られたイA～イD、ならびに筆者の発言ないし会話のやりとりのうち、紙幅の都合上、特に重要な示唆を与えられたものを文字化する。なお、現地の方言のまま記す(紙幅の都合上、表は次頁)。

【表3】(次頁)は30分弱の録音のうちの一部に過ぎないが、ここに掲げた会話のやりとりから導出される事実として、(web上には小僧さんの石像を訪れた個人のブログ、ならびに以下に挙げる「福岡よかとこ.COM」をはじめとした公式サイトの記事にも、「有名すぎる昔ばなし」「地元では誰もが知る」等の評価が並ぶのに対し)「はなたれ小僧さん」が、必ずしも地元民に浸透・定着した昔ばなしではないことが指摘されよう。また、表中の「イB-イC」間のやりとりから確認される「…げな、…げな(=…らしいよ、…らしいよ)」との捉え方、ないし「芯から聞いとらん(=(ナラティヴの)プロトタイプ⁸⁾は聞いたことがない)」と、【表1】に掲げた「口頭ナラティヴ(=口承民話)」において「伝聞形式」の形態が本質的特徴であるとの示唆は、以下の議論での重要となる。

8) ここでの「プロトタイプ」の語義は、三省堂(2006)『大辞林』第3版(松村明編、なお、頁数は、同辞書には記載なし)の「そのものや種類の特徴・本質を、最もよく表しているもの」を指す。

【表3】特記すべきインタビュイーの談話

| 現地聞き取り調査より得られた情報 抜粋) | | |
|--------------------------------------|--------|---|
| 題目 | 開始時間 | 会話内容 |
| 「はなたれ小僧さん」を知っているか | 7:08~ | 筆者の「はなたれ小僧さん」という民話は、インタビュイーは知っているのか」との質問に対し IC: どういう話とか、そういうんじゃないかと、そういう感じのはあった話で。 筆者: つまり、それは〇〇 (IC) が子供の頃から。 IC: ちや、私は知らんもん、そういうの。 ...中略... IB: そげんか言われてさ、ほんなこて、なんでん分からんたいね。 ID: うん。 |
| 民話の口承について | 17:12~ | ICの、IBへの「地元に残る民話には何かあるか」との質問に対し) IB: なんか。 IC: 民話がね、残つとらんやろかち言いよるばってんね。その、ちよつとほら、アタマがそげんな一つとこがあっただけで、ず一つとこ、話ちは。 IB: 分からん。 IC: 分からんもんね、誰も。 IB: うんうん、分からん分からん。 IC: 誰も言わんけんね、聞いたことなかちかね。 IB: 芯から聞いとらんけんね。 IC: 大体、芯から言う人もおらんもんね。 IB、IC: 笑い声) IC: あげんげな」ち聞いただけで、それ以上のことは誰も知らん。 |
| 地元に残る民話「七郎の滝」について | 17:37~ | 「地元の民話に「七郎の滝」というものがある、との話の中で) IB: 七郎の滝ちは、平家の滅びん時にね、七人の女官さんたちのね、あそこで死になはつたちは、聞いた。 IC: 「げな」つちこつちやんね。 IB: うんうん。 IC: 「そげな」つち話。 |
| インタビュイーの子供の頃、「はなたれ小僧さん」の民話を聞いたことがあるか | 21:07~ | IB: なんでん聞いとるばってんがら、「はなたれ小僧さん」だつて聞いとるばってんがら、芯から聞いとらんけんね。 筆者: 「はなたれ小僧」つてのは、結局、新しい話、けつこう最近の話つてこと? 「はなたれ小僧」つてのは。 IC: それが分からんつて。私は一切知らんかつたけん。んで、〇〇 (ID) も子どもの時ち言いよつたけんがら。 (ID) に向かって) 〇〇 (ID) がこまか時は、知らんめ? ID: よーと知らん。 IC: よーとち言うか、私や全然知らん。 ID: あつたかも知れんけど、ただその一、あの一、あの一、ちゃんと (「はなたれ小僧」の石像を) 作つてなかつたけんがら、建物 祠のことが無かつたけんがら、あれやつたかも知れん。 |

3. エビスナマスとエビナマス

「はなたれ小僧さん」のナラティヴにおいて重要な要素のひとつに、「エビスナマス／エビナマス」がある。ここでは、各ナラティヴ様態におけるこの語の使

用実態を抽出したうえで、それを切り口に、(コンテンツとしての)民話の伝播における解釈の共通点・相違点およびメディアの影響性について考察する。

3.1. 口頭ナラティヴにおけるエビスナマス・エビナマス

今回行った聞き取り調査では、インタビューからは、「エビナマス」に関し、全く知らない、あるいは、ストーリーの中でそれにあたるような存在があるような気もするが、それが「何を指し示すか」については分からない、との回答しか得られなかった(さらには、上掲【表3】に文字化したように、「はなたれ小僧さん」の民話のストーリー自体に関しても、「地元民全て知っているものではない」ことが確認された)。そこで、当該調査終了直後、筆者はICとともに、みやま市立図書館(住所:みやま市山川町尾野1706-2)に赴き、山川町郷土史研究会(2004)、松尾(1971)のコピーを得た(いずれも貸出禁止)。また、その際、パンフレットである、みやま市商工観光課(2009)を得た。これらの資料を踏まえ、ICに再度、他のインタビューを交えた、山川町郷土史研究会(2004)本文での閲覧ないし方言ないしストーリーの再検討を委ねた。結果として、ICからの筆者への報告としては「方言の間違いは無いが、『エビスナマス』が何かは分からない。また、『花しば』は『薪(燃料)』ではなく、『お供え物』ではないか」との意見を得た⁹⁾。ここで、現地在住のネイティヴが「エビスナマス」に対し「エビナマス」と同様の回答をしたことは、「エビスナマス」が「エビナマス」の方言形式ではないことの証左である。加えて、当該名詞が指し示す事物への具体的なイメージが無いことは、口頭ナラティヴ、特に「聞き語り」における焦点のあり方における重要な示唆となろう¹⁰⁾。

3.2. 書字ナラティヴ・TVアニメにおけるエビスナマス・エビナマス

一方、方言談話を忠実に再現した書字ナラティヴ(文献資料)の山川町郷土史研究会(2004)には、「エビスナマス」との表記が2箇所、存在する。

9) 当該アイテムに関する記述にも差異がみられるが、紙幅の都合上、この議論は後の稿に譲りたい。

10) 直接対話においては、結果的に、「はなたれ小僧さん」の起源は突き止められなかったものの、このような民話のあり方に対し、(【表3】にも記したように)ICより、「…げな、…げな」との捉え方が一般的だ、との報告を得た。つまり、書字ナラティヴ・入力ナラティヴのような「活字として残る」要素を持たないがゆえ、確かな証拠・資(史)料的根拠に基づく「プロトタイプ」の保存に比し、「現場性・一回性」が優先され、むしろテーマのみの伝承が重視されるものと推察する。

こん小僧さんな[はなたれ小僧さん]ち言うて、おじいさんの願いは、何でんかんでんかなえてくれらっしゃる。ただ、こん小僧さんなエビスナマスだけしか食べらっしゃれん。まい日エビスナマスば作ってさしあげてくだらんか。

(山川町郷土史研究会 (2004:2) 傍線は筆者による)

はなたれ小僧さんの石像が祀られた1988年、「はなたれ小僧さまの石像できる地区挙げて除幕式・山川町」という見出しの記事が「西日本新聞」1988年8月17日付・朝刊にあり、藤吉(1992)にも言及されているのに加え、聞き取り調査内でも、IDが、当該記事の存在に対し記憶があることを表明している。

(開始時間/6:46) 西日本新聞でね。こげんおーきゅう写真、はなたれ小僧さんの(筆者「うん。’)写真が載って、こう、い、どういうことじゃけん、こう、いろいろね、あったのは新聞に載ったけど。

当該新聞は、福岡県において特に購読者数が多い地方紙であり、したがって、同記事により「はなたれ小僧さん」を初めて知った、あるいは「内容を知った(=口頭ナラティヴの『…げな、…げな』形式の『聞き語り』の場合と異なり、『プロトタイプ』となる『コンテンツ』が『知識=コンテナ』に収まった)」という地元民がいることは容易に想像される。なお、仮にこの記事を「認知度の向上としての『契機』」とすると、そこに書かれたあらすじにおける表記が重要となるが、データベースからの確認では、「エビナマス」とあった。

一方、それ以前に残された文献資料における記述としては、多田隈(1929)、柳田(1942)、加来(1960)、松尾(1971)、柳田(1978)では「エビナマス」とあり、TV版の原版・リメイク版も、ともにナレーションは「エビナマス」であった。また、藤吉(1992, 2000)、あるいは入力ナラティヴのレベルでは、みやま市商工観光課(2009)をはじめ、「みやま市オフィシャルサイト」、「福岡よかこ.COM」¹¹⁾といった公式サイトなどでも、「エビナマス」とある。また、「エビスナマス」で検索(Yahoo!検索、検索日:2015年2月18日)したところ、3件、個人ブログがヒットしたものの、閲覧の結果、いずれも山川町郷土史研究会(2004)を引用したものであった。したがって、当該場面に登場する料理は、書

11) <http://www.fukuokayokatoko.com/> 検索日:2015年2月19日。

字ナラティヴ・入力ナラティヴのレベルでは、様態に関わらず、圧倒的に「エビナマス」となっていることが明らかとなった。

では、方言談話を忠実に再現した資料である山川町郷土史研究会（2004）における「はなたれ小僧さん」（ないしそれを引用した入力ナラティヴ）の「エビスナマス」と、他のメディア様態にみられる「エビナマス」は同一の料理（内容面）を指すのか。さらに「エビスナマス／エビナマス（表記面）」を包含したストーリーの相違点として現れる、メディア様態がナラティヴ自体に与える影響性とは何か。これら2点に関し、以下で検討する。

3.2.1 料理としてのナマス（膾・鱠）

まず、「エビスナマス／エビナマス」がいかなる料理であることを明示する必要がある。一般的に、「ナマス」といえば、正月のおせち料理にある「紅白なます（調味酢を用いた料理）」が想起される。事実、Yahoo!検索（検索日：2015年2月22日）で「えび なます」としたところ、【図1】の料理がヒットした。



【図2】甘海老の柚子なます

（「楽天レシピ」<http://recipe.rakuten.co.jp/recipe/> 検索日：2015年2月22日）

「エビスナマス」は、「はなたれ小僧さん」の中で重要なアイテム¹²⁾であるが、【図1】のような料理を指すのであろうか。これに関し、書字ナラティヴ・入力ナラティヴにおける「エビナマス」との対比からは、①「エビス／ナマス」、②「エビ／スナマス」（すなわち、「エビナマス」との対応として、①[エビス]=[エビ]、②[スナマス]=[ナマス]）の解釈が想定される。これに関し、上に引用

12) はなたれ小僧さん石像近くに流れる真弓川では、川エビが獲れていた、との記述が、「まじめに働く大切さを伝え 「はなたれ小僧さま」 26日、みやま市で祭り」とのタイトルで、「西日本新聞」（2007年8月26日付 朝刊）の記事にある。なお、当該記事は、「民話の里まつり」に関する記事ではあるが、後述の入力ナラティヴ（ロコミ）によるメディア伝播の影響性が明記されている。

した山川町郷土史研究会（2004:2）の「エビスナマス」が何かについては、同書 p. 4に爺さんの「こら、ばあさんや。おらあ近ごろ、冷たか水にはいってエビばとつとのえずうなってしまうたばい。」との発話があり、①の解釈は否定され、②の解釈が採用される。これらを踏まえ、以下では、「スナマス」とは何かを検討し、「エビスナマス」と「エビナマス」との関係性について考察する。

『日国』には、「スナマス」との項目があり、次のような記述がみられる。

す-なます【酢膾】[名]魚、貝、肉、野菜などを刻んで、酢などで調味した料理。なます。*東京新繁昌記（1874-76）〈服部誠一〉二・京橋煉化石「曰く光沢焼（〈注〉てりやき）、曰く鳥鍋、曰く酢膾、一品の値約ね五銭に出でず」

3. 1. のとおり、直接対話による聞き取り調査では「スナマス」を特定することはできなかったが、上掲記述より、【図1】のような「調味酢を用いた料理」の可能性が示唆される（「スナマス＝ナマス」）。一方、山川町郷土史研究会（2004）の「スナマス」の表記からすると、「[ス]+[ナマス]」における[ナマス]は「生肉＝刺身」となる（[ナマス]＝「調味酢を用いた料理」と解釈すると、[ス（＝調味酢）]とのトートロジーが生じる）。加えて、このように捉えるならば、山川町郷土史研究会（2004）以外の書字ナラティヴにおける「（エビ）ナマス」が指す料理に対する解釈においても、「生肉＝刺身」であったことが推察されよう。なお、『日国』「なます【膾・鱠】」の項目には「①魚介や獣などの生肉を細かく切ったもの。（筆者注：初出『日本書紀（720）』）…中略…②魚・貝・肉・野菜などをきざんで、二杯酢・酢みそ、いり酒などで調味した料理。（筆者注：初出『観智院本名義抄（1241）』）」とある。ここからも、「スナマス＝ナマス」が指し示す料理として、「（A）生肉＝刺身」、「（B）（【図1】のような）調味酢により調理した料理」、の2通りの解釈が可能である¹³⁾。

13) web版『語源由来辞典 (<http://gogen-allguide.com/>)』では以下の記述があり、現代において一般に知られる「調味酢を用いた和え物」ではないナマスの存在が指摘されている。

なますは、『日本書紀』や『万葉集』に「膾」の表記で見られ、生肉を細かく刻んだものを指した。生肉は「なま(生)」+「しし(肉)」で「なましし」と言っていたため、「なましし(生肉)」が転じて「なます」になったと考えられる。「なま(生)」+「すく(剥く)」の意味とも考えられるが、「生」に付く語という点から見て、「剥く」よりも「肉」の方が良いであろう。調味した酢にあえることからなますは「なま(生)」+「す(酢)」とも言われるが、なますに酢が用いられるようになったのは室町時代以降なので、「生酢」の意味ではない。

ただし、「エビナマス」を「エビの生肉＝刺身（むき身?）」とすると、前掲『日国』の記述（「[ス]+[ナマス]」における[ス（＝酢）]）に対し、新たな解釈可能性が導出される。すなわち、「スナマス」を「[ス（＝素）]+[ナマス]」とする捉え方である¹⁴⁾。すると、「エビスナマス」における「スナマス」に関し、「[ス]+[ナマス]」と分析したうえで、[ス]＝「酢（a）」「素（b）」、および前掲の（A）（B）より、理論上、4つの対象が想定される。

【表4】 「（エビ）スナマス」に対する理論上の解釈可能性

| 「スナマス」＝「[ス]+[ナマス]」 | a(ス＝調味酢) | b(ス＝素) |
|--------------------|-----------------------|---------------------|
| A(ナマス＝生肉・刺身) | Aa: 調味酢を用いた、生肉の料理 | Ab: そのままの、生肉の料理 |
| B(ナマス＝調味酢を用いた料理) | Ba: 調味酢を用いた、調味酢を用いた料理 | Bb: そのままの、調味酢を用いた料理 |

【表4】は、「スナマス」に対するふたつの基準より理論上可能な分類であるが、ここで、Ba（調味酢を用いた、調味酢を用いた料理）は、前述の通り、トートロジーとして存在し得ない解釈となる。加えて、Bb（そのままの、調味酢を用いた料理）の解釈は、不可能ではないものの、【図1】のような料理を「素」とすることは、「素」でない料理との対比を示唆し、いわば「【図1】を料理の原材料とした他の料理」の存在を認めることとなり、無理がある。ゆえに、「スナマス」の解釈は、Aa（『日国』の記述にある料理）またはAb（いわゆる「刺身」）に限定されることとなる。すなわち、山川町郷土史研究会（2004）における「エビスナマス」の[ナマス]自体は、【図1】のような料理を指し示すもので

加えて、京都・富士酢醸造元、飯尾醸造のHPでは、「酢の歴史」を紹介している（一部抜粋）。

日本で酢が造られるようになったのは、4～5世紀ごろ。中国から酒を造る技術とともに米酢の醸造技術が伝えられ、和泉の国（今の大阪府の南部）で造られるようになったのがはじまりとされています。…中略…『養老律令（718年）』には作酒司（さけのつかさ）が酒とともに酢を造っていたことが記されています。ただし、当時のお酢は朝廷や貴族専用のもの。庶民には手の届かない贅沢品でした。酢が調味料として一般に広まったのは江戸時代になってから。

(<https://www.iio-jozo.co.jp/mame/history> 検索日:2015年2月18日)

ゆえに、日本におけるナマスたるや、歴史的には必ずしも（少なくとも、近世以前の民衆の間では）酢を調味料として用いた料理とは限らなかったことが指摘されよう。一方、「はなたれ小僧さん」の老夫婦が貧乏な暮らしをしていた設定からすると、そこで「酢」が用いられているのであれば、当該民話が、近世期以降に誕生したものと推察される。なお、松尾（1971:67）には、「約二百年前のこと真弓村に住んでいた老夫婦の…」とあり、時代的（江戸時代）にも合致する。

- 14) 『日国』「す【素】」には、「①他の要素がつけ加わらない、ありのままのさまをいう。そのままであること。他の語と複合して「素肌」「素手」「素足」「素顔」「素焼」などと用いることもある（筆者注：初出『志不可起（1727）』「何によらずかざりつくろひのなきを、すのままなど云、素の字也）」とある。また、接頭辞の用法として「名詞などの上に付けて用いる」とある。

はないと断定できよう。ただし、[ス(=酢or素)ナマス]は、【図1】に類似する料理であることの可能性を孕みつつ、特定には至らなかった。

しかしながら、筆者は、この結果こそが「エビスナマス／エビナマス」の形式面・内容面、ひいてはストーリーの展開に至るまでの不確定性を特徴とする、口頭ナラティヴの起源性の発露であることを強調したい。すなわち、今回の現地聞き取り調査に基づく【表3】ならびに3.1の議論を通じ、注14にも掲げたような「プロトタイプ保持の非優先性」が本来的なナラティヴであることが確認される。一方、文字言語以上のメディア様態においては、万人に共通的に認知され、複製可能な状態にある「プロトタイプ」が存在する。したがって、元来は個別に異なった箇所があって当然であった民話内での微細なズレが、文字ナラティヴ以上では齟齬・差異として顕現してしまうものと結論づけられよう。

3.2.2 「まんが日本昔ばなし」の「エビスナマス＝エビナマス」

ところで、3.2.1より、仮に「エビスナマス＝エビナマス」を「川えびの刺身に調味酢を加えた料理、あるいは、川えびの刺身(むき身?)」としたうえで、TVアニメ「まんが日本昔ばなし」での同料理について検討したい。すなわち、同じ書字ナラティヴをもととしても、「読み聞かせ」による口頭ナラティヴへの変換と、「(映像の補助を得た)ナレーション」による口頭ナラティヴへの変換とでは、視覚的情報の有無により、受信者側の認知・理解に大差があろう。また、伝播性の観点からも、認知度向上への効果として、アニメの存在は重要である。

【表2】より、「まんが日本昔ばなし」における原版(1976)とリメイク版(1990)では、スタッフが異なり、ナレーションによるナラティヴもまた、共通点・相違点が認められる。両アニメの視聴後、「エビスナマス＝エビナマス」に関わる事柄に限定し、筆者が認めた限りでの共通点・相違点を【表5】に示す。

【表5】 原版・リメイク版での共通点・相違点

| 放映 | 主人公 | 主人公の性格 | 表現 | 付随表現 |
|------|-----------------------------|--------|-------|----------|
| 原版 | 爺さんのみ | 謙虚→強欲 | エビナマス | 獲りたての… |
| リメイク | 若い(?)男のみ | 謙虚→強欲 | エビナマス | 頭と殻を取った… |
| 放映 | その他、エビスナマス／エビナマスに関する事項 | | | |
| 原版 | 汁物(?)→エビナマス1日3食。 | | | |
| リメイク | 刺身→エビナマス1日2食。小僧が夜中にエビナマス欲求。 | | | |

まず、主人公であるが、原版・リメイク版ともに「婆さん」が出てこない。この点に関し、文献における記述には、山川町郷土史研究会（2004:1）の「むかし、この村里に、とても正直なおじいさんとおばあさんが、なかよう住んどったげな。」をはじめ、加来（1960）、松尾（1971）、藤吉（1992, 2000）、加えて、観光パンフレットであるみやま市商工観光課（2009）には「老夫婦」とある。一方、多田隈（1929）に基づく柳田（1942:56）には「昔この里に一人の老翁があつて、毎日山に行つて枯枝を拾ひ集め」、吉田（1987:106）には「真弓という山のなかの小さな村里に一人のおじいさんがいた。」とある。さらに、文献上の相違点に関し、布村（1994:3）には「（筆者注：加来（1960）に言及し）ここではおばあさんがでてきているし、薪が柴にかわり美しい女は川の面に立っているのではなくて、おじいさんの後に立っていると変わっています。」との指摘がある。一方、ナレーションの台本では（視聴対象が「全国の=非・地元」の「不特定多数=非・個人」であるがゆえ）以上の齟齬・差異が無化され、また、方言の共通語化、特定地域のみ存在する事物の一般化などの編集が行われている。結果として、映像的效果も影響し、特に初見の視聴者にとっては、文献、さらには口頭ナラティブの範疇にある「はなたれ小僧さん」とは乖離した認知・理解を得ることとなる。ただし、TVメディアの次元においても、「原版—リメイク版」の間には【表2】・【表5】の差異があり、特に、ナラティブの視覚的補助となる「画像」において極端な齟齬が認められるのである（【図2】【図3】）。



【図2】 原版の主人公（1分23秒）



【図3】 リメイク版の主人公（2分1秒）

同様に、「エビスナマス=エビナマス」については、ナレーションでは両者とも「エビナマス」に統一され、文献資料における差異が無化されているが、反面、映像では【表4】「調味酢を用いた料理（Aa）／細かくした生肉=刺身（A

b) 」との差異がそのまま反映される形で表現されている（【図4】 【図5】）。



【図4】 原版の「エビナマス」



【図5】 リメイク版の「エビナマス」

【図4】は原版の7分02秒のシーン、【図5】はリメイク版の5分32秒のシーンを抜粋したものである。原版では汁物らしきもの（＝調味酢に漬けたもの？）、リメイク版では川えびのむき身（＝刺身？）を山盛りにしたもの、となっている。3.2.1を踏まえると、口頭ナラティヴの次元における実態に関する聞き取り調査では特定されなかった相違点「[ス（＝酢or素）ナマス]／[ナマス（刺身に調味酢を加えた料理or刺身（むき身？））」、換言すれば同語の「内容面での齟齬」が、言語形式面での差異を同一化にもかかわらず、本来的にはナラティヴの補助的役割である映像により、TVメディアにおいて露見した結果となる。

さらに、【表5】からは、登場人物の「動作（＝映像：ナラティヴ補助）」・「発話（＝ナレーション：書字ナラティヴの口頭化）」の差異を起因とし、場面展開のあり方も異なってくる。例えば、原版では、文献資料にみられる場合と同様、水神様は爺さんに「（はなたれ小僧さんに）1日3回、エビナマスを与えて下さい」と告げる場面がある。ところが、リメイク版では「朝と晩（＝1日2回）、エビナマスを与えるのじゃ」と、回数が減っている。加えて、発話における文末も、依頼する表現から命じる表現へと変わっており、水神様自身の人格（神格？）における乖離も示唆されよう。そして、はなたれ小僧さん自身についても、文献ならびに原版では一切発話する場面が無いが、リメイク版では、夜中に老夫婦を起こし「エビナマス！エビナマス！」とせがむ場面がある。

以上、TVメディアでの「はなたれ小僧さん」の実態を見てきたが、文献資料の記述における場合とは別個の共通点・相違点が浮き彫りとなったといえよう。その背景には【表2】にまとめた制作上の差異が認められることは確かであるが、さらには、台本の底本とした文献（プロトタイプ）上での差異、ならびに編集に

よる修正加工が反映していると指摘される。そして、補助的な視覚情報の作用により、受信者側のイメージ形成を「個別」ではなく「共通」とせしめている点
が、当該メディア様態の最大の特徴といえよう。

3.3. 「はなたれ小僧さん」をめぐるナラティヴ様態・メディアの影響

以上の検討をもとに、「はなたれ小僧さん」における「エビスナマス／エビナマス」を切り口に、ナラティヴの表現面、内容面、ストーリー展開、そして地域面における相違点とメディア様態との関係について、【表6】としてまとめた。

【表6】書字ナラティヴにみられる「はなたれ小僧さん」

| 資料 | ナラティヴ様態 | 県名 | 表記 | 言語形態 |
|--|---------|----|--------|---------|
| 多田隈(1929) | 書字(文献) | 熊本 | エビナマス | 標準語 |
| 柳田(1942) | 書字(文献) | 福岡 | エビナマス | 標準語 |
| 荒木(1960)※ | 書字(文献) | 熊本 | エビナマス | 標準語 |
| 加来(1960) | 書字(文献) | 福岡 | エビナマス | 標準語 |
| 松尾(1971) | 書字(文献) | 福岡 | エビナマス | 標準語 |
| TBS原版(1976) | 書字(テレビ) | 熊本 | エビナマス | 標準語+α※2 |
| 柳田(1978) | 書字(文献) | 福岡 | エビナマス | 標準語 |
| 柳田(1983) | 書字(文庫) | 福岡 | エビノナマス | 標準語 |
| 吉田(1987) | 書字(文献) | 熊本 | エビナマス | 標準語 |
| TBSリメイク版(1990) | 書字(テレビ) | 熊本 | エビナマス | 標準語+α※2 |
| 藤吉(1992) | 書字(文献) | 福岡 | エビナマス | 標準語 |
| 藤吉(2000) | 書字(雑誌) | 福岡 | エビナマス | 標準語 |
| 山川町郷土史研究会(2004) | 書字(文献) | 福岡 | エビスナマス | 方言 |
| みやま市商工観光課(2009) | 書字(パンフ) | 福岡 | エビナマス | 標準語 |
| ※荒木(1960)については、は吉田(1987)からの引用である。 | | | | |
| ※2「+α」は、いわゆる「役割語」(金水(2003))を指す。方言ではない。 | | | | |

【表6】より、TVの映像付き書字ナラティヴとしての伝播に加え、ナラティヴ掲載媒体に、2000年以降、「雑誌」「パンフレット」が出現し、紙媒体でも、より手にしやすいかたちになっていることが分かる。この契機は、TVアニメ放映(1976年)による民話の全国的伝播や、1988年のはなたれ小僧さん石像の設置に認められ、現今では「はなたれ小僧さん」を地域活性事業(催事の実施、関連商品の販売など)に結びつくコンテンツとして利用する機運が高い。例えば、みやま市公式HP (<http://www.city.miyama.lg.jp/> 最終検索日:2015年12月12日)では市の年別経常収支に関わる「事務事業シート(管理コードJ000206、施策コードP4302、主管課長:松尾博、決定権者:横尾健一)」を毎年公開しており、そ

こには「地域が輝くまちづくり（産業）」と銘打った事業の予算・指標・活動報告・評価内容・今後の方針が詳細に記されている。この事実からも裏付けられるように、現状における昔ばなし「はなたれ小僧さん」は、いわば地方自治体の財源確保に必須となる公共資源と役割を担っており、結果、当該民話はみやま市に足を運ぶ人々を増やすための「情報」として、消費社会に発信されているのが現状と指摘されよう。加えて、以下の4.の議論を先取りするならば、前述のweb2.0以降の動向を踏まえ、前掲の個人ブログにおける「はなたれ小僧さん」もまた、「オープンメディア型」社会ならではの「消費者発信『即』販促（または不買）効果」の一実例として範疇化されることとなり、したがって、ナラティブが「メディア」「マーケティング」の外的要因に晒されている現状を浮き彫りとする好例としてその姿を変貌させていることを付言しておきたい。

一方、その他の面に目を向けるならば、2.2に記したように、「熊本／福岡」の不統一の根底には、多田隈氏が南関（熊本県）で採取したものと、大中氏が真弓村で採取したもの、という「口頭ナラティブ→書字ナラティブ」の推移における発信元（口頭ナラティブ）の差異がある。ただし、聞き取り等を通じた調査では、「はなたれ小僧さん」をめぐる起源論争は確認されなかった。その理由には、口頭ナラティブの連鎖（＝「聞き語り」）における「…げな、…げな」との伝播様態、すなわち「プロトタイプ：無」との特質の影響性が示唆される。

これに関連し、上掲の布村（1994）では、文献資料として残る限りでは、柳田（1942:54-55）が多田隈（1929）を紹介しつつも、そこで「玉名郡の眞弓」と表記していることをもとに、「福岡県の民話」と認めている。加えて、「口頭ナラティブ→書字ナラティブ」の推移の過程における多田隈氏の視座に関しては、吉田（1987）に詳しい。すなわち、同稿には多田隈氏との直接対話の記録があり、「（筆者注：採集に関し）多田隈さんに問うたところ、「ハナタレ小僧様の採集の件は色々と考えて見ましたが、何処から聞いた話か尚判然思い出せません。能田氏¹⁵⁾が書いて居られる家の女どもから聞いたことで無いのは確かですが」、という返事であった（吉田（1987:107））」とある。つまり、多田隈（1929）の書字ナラティブの根底には、「聞き語りのメモ（連鎖する口頭ナラティブ→書字ナラティブ）」との経緯があり、結果、書字ナラティブにおける「活字」を伴うプ

15)能田（1935:32-36）には、多田隈氏が熊本県玉名郡南関町において採取した口頭ナラティブが、多田隈氏の母（玉名郡春富村出身）からであったと明記されている。

ロトタイプ形成の起源自体に「プロトタイプ：無」の背景性が認められ、上掲各資料における差異・齟齬に対する本質解明への困難性が指摘できよう。

さらに、「エビスナマス＝エビナマス」に関しては、書字ナラティヴレベルでの表記面では、山川町郷土史研究会（2004）、あるいは柳田（1983:44）の「海老の鱈（エビノナマス）」を除き、「エビナマス」であったものの、3.2.1より、AaまたはAbの解釈可能性が浮き彫りとなっている。一方、現地聞き取り調査、ならびに【図4】【図5】として示したTVメディアによる映像化における齟齬からも、当該料理を正確に特定することの困難性が確認された。以上の結果より導出される考察として、本来は「エビスナマス＝エビナマス」が「はなたれ小僧さん」において重要なアイテムであるにもかかわらず、ナラティヴとしては、より「テーマ」の伝達に重点あることが挙げられる。かつ、録音された会話のやりとりからは、ナラティヴ様態の如何を問わず、「奢れる平家は久しからず」¹⁶⁾との諺こそが、当該民話を語り継ぐうえでの焦点となっていることが窺えた。例えば、口頭ナラティヴレベルでは、直接対話（イA、イB。【表1】参照）より、「七郎の滝」をはじめ、山川町における平家にまつわる伝承を、複数確認した。また、書字ナラティヴレベルでは、まず、文献資料としては藤吉（2001:1）に「最初は正直で勤勉なお爺さんが、神の福德に与るうちに怠慢で傲慢な者になり果て、遂には水神さまとの約束も反故にして神の意志に逆らって落ちぶれる」とのテーマを明記しており、他の資料においても、この点は変わらない。また、TVメディアを用いた書字ナラティヴにおいても、【表2】あるいは3.2.2の検討より、内容面における差異は認められつつも、テーマ自体は一貫している。すなわち、主人公、「エビスナマス＝エビナマス」、「薪／花しば」等、個々の要素はナラティヴ様態の推移・メディアの影響を受け差異化してゆく流動性を特徴とする一方、テーマは逆に、これらの影響を超えた固定性が特徴と見做されよう。これは、換言すれば「ナラティヴにおけるメディアの作用性」において、個別要素に比し、テーマへの影響が希薄であることを窺わせる。当該論点に関しては、今

16) web版「故事ことわざ事典」によると、当該諺の注釈は、以下の通りである。地位や財力を誇り、思い上がって勝手な振る舞いをすれば、必ず滅びる時がくるとのこと。『平家物語』に「驕れる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし」とあるのに基づく。栄華をきわめた平家の天下も長くは続かず、権勢を誇り驕慢になった者は必ず失脚するものである。勢いが盛んな時ほど慎まねばならないという戒めを含む。

(<http://kotowaza-allguide.com/> 検索日：2015年2月26日)

後、上述の「(花)しば」の問題などの個別要素を取り上げ、ゆくゆくは、包括的・総合的にその様相を描写したいと考える。

4. 入力ナラティヴにおける「はなたれ小僧さん」

最後に、上述したナラティヴ様態の推移に関する議論を踏まえ、入力ナラティヴにおける「はなたれ小僧さん」の実態把握を通じ、その特徴を抽出する。

まず、入力ナラティヴのメディア上の特徴は、大谷(2015a)にも指摘したように、「いつでも・どこでも、即時的に、双方向的な」発信が行える点にある。特に、Web2.0以降、ソーシャルメディアの様態が爆発的に多様化したことにより、各種公式サイトのみならず、個人が様々な情報発信・伝播を行うことが可能な現状にある。また、ナラティヴ様態の推移についても、他の2様態とは異なる実態が指摘される。すなわち、クロスメディアによる広告的発信、個人の動画投稿を含めた情報発信、さらには掲示板(web上のコミュニティ)上での情報交換等々、雑誌を含む書物による伝播に比し、その広範性は世界レベルに達する。

次に、入力ナラティヴにおける「はなたれ小僧さん」の記述に関しては、原典すなわちプロトタイプからのコピー&ペーストが注目される。これは、書字ナラティヴにみられる引用とは異なり、発信者主体が、自身が得た情報を容易に反復し拡散する方法である。結果として、原典に対する再検討ないし自身のナラティヴとの弁別性、ないし発信者主体の特定可能性が低い傾向にある一方、原典資料を「そのまま」再現することが可能である点が、重要な特徴とされよう。

以上の当該様態によるナラティヴでは、web検索にて容易に「エビスナマス」の記述がある個人ブログとして観察可能である。すなわち、各々、山川町郷土史研究会(2004)を抜粋しコピー&ペーストし紹介するものの、総じて特定可能性の低い発信者主体によるナラティヴの一部として組み込まれている。無論、この様態では、口頭ナラティヴにみられる「…げな、…げな」との伝聞としての特徴、ないし「はなたれ小僧さま」の要素・内容・展開面での差異は(上掲のTVメディアにおけるナレーション台本作成における場合とは異なる形で)捨象されることとなる。現今の消費者による紹介の差を鑑みれば、今後、より入力ナラティヴによる「はなたれ小僧さん」の伝播・拡散が主流となろう。しかし、この様態

が完全な「原典の複製」の連鎖との様相を醸成することは、例えば、「エビスナマス＝エビナマス」とは何か、といった、語り継がれる個々の民話における差異性に基づく興味・関心を削ぎ落すことを意味しよう。柳田（1983）「はしがき」では、昔ばなしの「面白い点」として、「まるで同じかと思っている話が、いつの間にか少しはちがっていること（柳田（1983:16））」を指摘しており、内容・要素面での差異性・流動性が失われることは、メディアの影響性が、注に掲げたナラティブの定義自体の改変可能性を孕むことを示唆する。

以上を総括し、再び「ことば—メディア」の相関関係に目を向ければ、web2.0以降、これら2項に加え、新たに「マーケティング」の視座の導入が必要であることが浮き彫りとなろう。無論、これら3項を想定した考察は、web2.0以前にも存在した。例えば、村田（2004）は、TVメディアのCMにおけることばの量的調査を、視聴者（＝消費者）の「好感度」を論点に行い、次のような結論を示す。

テレビコマーシャルで使用されることばが、実際に我々が使用していることばに影響を与えるというのは否定できないが、同時に、制作者側が視聴者の好感を得るために、実際に使用されていることばのトレンドをいち早くとらえ、それをコマーシャルに反映している。（村田（2004:32））

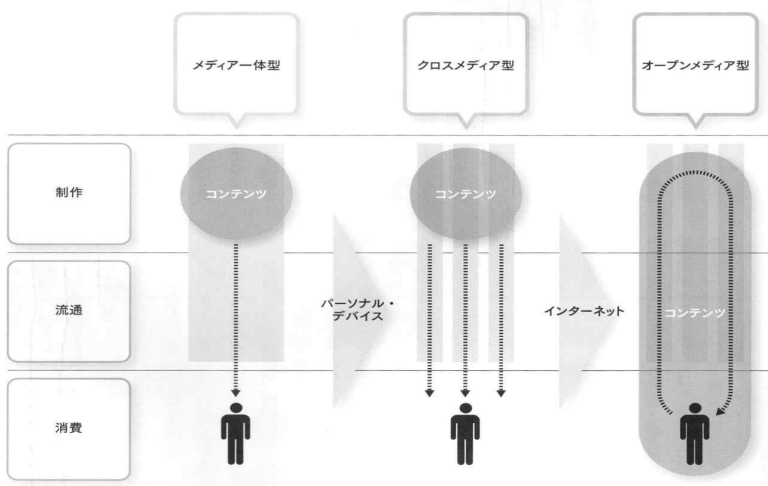
しかしながら、同論に「（松岡（2015）の意味での）コンテンツ」、ならびに松井（2013:46-72）にて提示された「理屈づけ¹⁷⁾」の考え方が欠如している。後者

17) 松井（2013:49-53）では、イノベーションに対する正当性（legitimacy）確立における「理屈づけ」の役割を紹介し、特に、「ある社会的事実が客観的現実の一部として自明視される状況（松井（2013:49））」の形成（＝自明化）に際しての必須要件であるという。また、「理屈づけ」の本質的役割は、「なぜそのイノベーションが効果的なのか、どのような組織にとって有効なのか、ということについての因果的な概念形成（松井（2013:51））」にあり、換言すれば、イノベーションの「語られ方」自体が、当該事物・事象に対する社会的認知を醸成するという。加えて、流行やブームが「単にイノベーションが広がるプロセスであるということではなく、何が適切で価値があるものなのかということについての理解を共同で形成していく意味形成プロセスである（松井（2013:52））」との指摘は、村田（2004）に欠けている視座である。さらに、「ことば—マーケティング」間での相互作用と「言説」間での相互作用、との構造の二重性（松井（2013:63-64））をしたい。すなわち、「企業—メディア」間、ないし「『企業—メディア』—大衆」間における相互作用は動的・循環的なものであるとし、企業やメディアからの言説が、「理屈づけ」としてその相互作用を強化する一方、受容側（＝消費者側）の行動や考え方が、「自明化」に至るまでの過程において、ある流行・ブームに作用するとの発想である。当然、コンテンツは「ことば」とともに実在し、その意味で、ことばの意味変容は、関連コンテンツのイメージに対する社会的な「認知」の変容を示唆する。

は紙幅の都合上、理論的概要を注にて抜粋したもののみ掲載であるが、入力メディアにおける上掲諸特徴、ならびに発信主体の多様化に伴う影響の相補性の視座は、明らかに村田（2004）を超え、かつ、現状把握に適した視座である。既に3.3にて指摘した実態があるように、「はなたれ小僧さん」が口承民話の枠を超え、地域活性のための要素となっている以上、web検索にて容易に閲覧可能な個人ブログでさえ、副次的に販促効果が期待されるのである。

森（2015:47）によれば、メディアは「コンテンツをつくり出し（制作）、それを流通させ（流通）、生活者に消費してもらい流れの中から収益を得てきた」とされてきた常識が、web2.0以降、危機に瀕しているという。すなわち、現今の「オープンメディア型」メディア産業においては、生活者（＝消費者）がコンテンツの発信主体となることが少なくないこと（次頁、【図8】参照）は、筆者の主張を擁護するものである。ここからも確認されるように、村田（2004）で想定されている「メディア／消費者」との対立軸自体が消失しているのが実態であり、より根源的には、web2.0以降の入力ナラティヴにおける当該メディア様態の特徴が、3.2.2に論じたTVメディアの場合での「編集ならびに視覚的補助による共通化・プロトタイプ形成」とは別個に、根源的なナラティヴ様態である口頭ナラティヴでの諸特徴を消失せしめているものと結論づけられよう。

【図表1】メディア産業の3段階の変遷



【図8】メディア産業の推移（森（2015:47））

5. まとめ

以上、本稿では福岡県みやま市の民話とされる昔ばなし「はなたれ小僧さん」に着目し、web上での言説において「有名」「誰もが知る」との文言に疑念を抱いたことをきっかけとし、その実態把握ならびにナラティブ伝播におけるメディア様態の影響性に関し、特に当該民話内の重要なアイテムである「エビスナマス／エビナマス」の文献資料における表記上の差異に関する検討を切り口に調査・考察を行った。以下、メディア様態ならびに調査方法別に、以上の議論より浮き彫りとなった事項を端的にまとめ、改めて記すこととしたい。これは、2.にて掲げた「話し言葉—書き言葉—打ち言葉」の枠組みを援用したナラティブ研究の開拓に寄与する可能性があり、改めてその重要性を強調する。

A. 口頭ナラティブ（口頭メディア次元）

<方法論：現地在住ネイティブへの直接聞き取り調査>

- ・プロトタイプ：無（聞き語りの「…げな、…げな」）
- ・「聞き語り（個対個）」による伝播…即時性：有、一回性：有、広範性：無
- ・「はなたれ小僧さん」への、コンテンツとしての関心：無

B-1. 書字ナラティブ（活字メディア次元）

<方法論：現地図書館蔵書を含む文献資料・史料の閲覧>

- ・プロトタイプ：無（現地ネイティブからの聞き語り調査メモに基づく文字化）
- ・「活字」による「個」対「不特定多数」の伝播。即時性：無、一回性：無、広範性：有？（活字資料への関心が無ければ手に取らない）
- ・「はなたれ小僧さん」への、コンテンツとしての関心：無（先行研究）or有（新聞記事、観光パンフレットなど）

B-2. 書字ナラティブ（TVメディア次元）

<方法論：メディアアーカイブの視聴>

- ・プロトタイプ：有（資料・史料に基づく台本制作）
- ・「活字＋映像（補助的要素）」による「個」対「不特定多数」の伝播。即時性：無、一回性：無、広範性：有（TVをつけていれば目に入る）
- ・「はなたれ小僧さん」への、コンテンツとしての関心：有（視聴率獲得要素）

C. 入力ナラティヴ (webメディア次元)

<方法論：web検索に基づくサイト閲覧>

- ・プロトタイプ：有（各種活字資料からのコピー&ペースト）
- ・「活字+映像（補助的要素）」による「個」対「不特定多数」の伝播。即時性：有、一回性：無or有（発信者による削除如何による）、広範性：有。
- ・「はなたれ小僧さん」への、コンテンツとしての関心：無（個人的記事としての発信）or有（閲覧による知名度強化への期待）

以上は、福岡県みやま市に残る民話「はなたれ小僧さん」に対するメディア様態ごとに分類したうえでの実態の素描にすぎず、本稿ではこれを「仮説」として提示するにとどめたい。しかし、「ことば—メディア—マーケティング」のトリニティ的相互関連性¹⁸⁾の視座を導入することで、かつてナラトロジーによる文学的研究の対象として注目されていた民話に関し、新たに語学的関心、すなわち「ことばへの、外的要因の作用性」の視座からの検討可能性の道が開けた点は、本稿の学術的意義の重要性を如実に示す結果となったこととして強調したい。

【参考文献】

- 大谷鉄平（2014）「日本のソーシャルメディア研究に対する小考—「打ち言葉」の文体論的把握を中心に—」『第3回韓国日本研究総連合会国際学術大会』発表論文集 pp. 65-68
- _____（2015a）「「商用ナラティヴ」研究の現状と課題」『日本文化学報』、韓国日本文化学会 pp. 107-127.
- _____（2015b）「流行語「キャバクラ」の出現推移—ことばとマーケティングとの視座から—」『日本語文学』64輯、韓国日本語文学会 pp. 53-74.
- 加来宣幸（1960）『福岡の民話』、未来社 pp. 45-48.
- 金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』、岩波書店 pp. 1-225.
- 多田隈正巳（=嶺香生）（1929）「ハナタレ小僧様」『旅と伝説』2-7、三元社 pp. 20-21.

18) ことばの科学と隣接：周辺諸科学との関連は日本語学の領域においても注目度が低くなくより広範に「言語学と隣接諸科学」とすれば、管見の限り、その先行研究としてJarkobson（川本他訳：1973）、Sapia（安藤訳：1998）まで遡ることができよう。すなわち、前者pp. 225-270では「言語科学と隣接諸科学」、後者ではpp. 358-380「言語と人種と文化」、pp. 381-415「言語と文学」の章において、緻密かつ独創的な知見が確認される。筆者もまた、これらの論考における主張に賛同する。

- 布村一夫 (1994) 「熊本民話を掘る 第二話 はなたれ小僧さま」 『女性史研究』 28、家族史研究会 pp. 2-6.
- 能田太郎 (1935) 「玉名郡昔話」 『昔話研究』 1-5、民話伝承の会 pp. 32-36.
- 野村眞木夫 (2000) 『日本語のテキスト—関係・効果・様相—』、ひつじ書房 p. 37.
- 藤吉齊 (1992) 「はなたれ小僧さま—山門郡山川町真弓—」 『三池史談』 20、三池史談会 pp. 18-23.
- 藤吉齊 (2000) 「民話に探る日本人の心性」 『地方史ふくおか』、福史連 p. 1
- 松尾龍城 (1971) 『山川町地方の歴史と伝承』、山川町教育委員会 pp. 67-70.
- みやま市商工観光課 (2009) 『みやま浪漫 (福岡県みやま市観光ガイドブック)』、みやま市商工観光課 p. 11.
- 村田和代 (2004) 「テレビコマーシャルの好感度」 『メディアとことば1』、ひつじ書房 pp. 2-35.
- 森祐治 (2015) 「人はコンテンツにお金を払い続けるか」 『Harvard Business Review』 2015年7月号、ダイヤモンド社 pp. 44-54
- 柳田国男 (1942) 『桃太郎の誕生』、三省堂 pp. 54-58.
- _____ (編) (1978) 『日本の昔話・日本の伝説』、旺文社 pp. 41-43.
- _____ (1983) 『日本の昔話』、新潮文庫 pp. 14-44.
- 山川町郷土史研究会 (編) (2004) 『山川町の民話・伝説・伝承』、山川町郷土史研究会 pp. 1-4.
- 吉田淑子 (1987) 「ハナタレ小僧さま—採取者・多田隈正巳氏のこと—」 『女性史研究』 22、家族史研究会 pp. 106-107.
- Roman, Jakobson (川本茂雄、田村すゝこ、村崎恭子、長嶋善郎、中野直子訳、1973) 『一般言語約』 みすず書房、pp. 225-270.
- Edward, Sapia (安藤忠貞雄訳、1998) 『言語』 岩波書店、pp. 358-415.

【付記】

本稿作成のための現地聞き取り調査にご協力いただいたインタビューのうち、イAは、2015年6月に永眠した。今回の研究成果の報告が不可能となったことが悔やまれる。ここに、哀悼の意を表するとともに、故人の冥福をお祈りいたします。

| |
|-------------------------|
| 논문 투고 일자 : 2015. 12. 28 |
| 논문 심사 일자 : 2016. 1. 31 |
| 게재 확정 일자 : 2016. 2. 4 |

< 要旨 >

ナラティヴへの、メディアの作用性 — 「はなたれ小僧さん」の「エビスナマス」を例に—

大谷鉄平

本論文は、福岡県みやま市（＝旧：山門郡山川町）に残る昔話「はなたれ小僧さん」に対し、昔話を構成する諸々の要素の関係とメディアの推移による影響性に対して考察したものである。

筆者はこの検討の方法として、4点の調査方法に基づき考察した。当該方法は以下の通りである。

①現地に住む人々から聞き取り調査を行い、口頭によるナラティヴに対するメディアからの影響を明らかにする。

②現地の図書館の外に残っていないものなどを含み、文献資料及び史料の閲覧を通じて、活字によるナラティヴに対する、メディアからの影響を明らかにする。

③テレビメディアのアーカイブ(archive)資料として残るテレビアニメーションの視聴をもとに、活字+映像によるナラティヴに対するメディアからの影響を明らかにする。

④webの検索機能を利用した公的私的に作られたサイトの閲覧を通じ、web上の入力ナラティヴに対するメディアからの影響を明らかにする。

以上の調査結果を総合し考察を行った結果、ナラティヴへのメディアやマーケティング、すなわち外的要因の作用性が、言葉の次元においても観察されることが浮き彫りとなった。

The Effects of the Media to Narrative

-Taking the "EBI(SU)-NAMASU" of "HANATARE-KOZOU-SAN" for Instance-

OTANI, Teppei

This paper considered the relationship between the elements of a folk story and a change or variation in media, focused on a tale left in MIYAMA-shi, Fukuoka-prefecture, whose name is "HANATARE-KOZOU-SAN, A Sniveling Boy".

The writer chose four investigation methods namely:

(1) To make the influence from media about "narratives by ORAL" clear by interview survey from the people who live in MIYAMA-shi.

(2) To make the influence from media about "narratives by a PRINTING TYPE" clear by reading document material and historical sources including the one left only in a local (=MIYAMA-shi) library.

(3) To make the influence from media about "narratives with a PRINTING TYPE + a PICTURE" clear by watching a remaining cartoon as archive material of television media.

(4) To make the influence from the media about "narratives on the web" clear by reading sites made privately or publicly, using a checking function of web.

As a result, from the above-mentioned investigation, the possibility of the influence of "external action from media and marketing" to words became clear.